

影に関する実験的検討, さらに臨床応用にて新たな知見を得た。従来の水溶性造影剤は腰部に限定され, しかも副作用として痙攣がみられた。本剤による動物実験では全脊髄腔を造影したにもかかわらず痙攣は全くみられなかった。臨床応用でも7例に施行し, 頸, 胸, 腰部に対し10ml以上を用いて造影したが軽度の頭痛を訴えたのみで痙攣はみられず, 造影効果も良好であった。

26. 外傷性股関節脱臼症例の検討

○小野 豊, 高橋淳一, 平山景大
林 謙二, 高木学治(千葉労災)

過去10年間当院において経験した外傷性股関節脱臼につきこの疾患の主なる合併症である変形性股関節症, 大腿骨頭壊死を含めた予後調査をおこなった。今回追跡調査できた19症例を日整復までの期間, 免荷期間, X線所見, 治療法につき検討し報告した。

27. 当院における踵骨々折観血的療法の経験

○西山 徹, 坂巻 皓, 布施吉弘
岡崎壮之, 黒田重史(川鉄)

踵骨々折は日常しばしば遭遇する骨折であり, 我々は最近観血的治療をした症例の直接検診を行ったので若干の考察を加えて報告する。

我々が行っている A・O cancellous screw による観血的整復術によると, 1) 術後出血が無い, 2) 骨片間の圧迫が可能である。3) 術者は1人で十分である。4) 手術時間が短い, 5) 感染の恐れが少ない, 6) 入院期間の短縮可能等, 有利な点があげられる。

27. 当院における上腕骨遠位端骨折の204例

○三橋 稔, 加藤之康, 陳 義龍
中村 勉, 後藤澄雄, 中村哲雄
(三橋整形外科耳鼻科病院)

昭和45年から6年間に当院で治療した小児の上腕骨遠位端骨折204例について検討した。治療は初診時のX線上の骨転位の程度により外来観察, 入院での垂直牽引, K-wire 固定等を施行したが, 観血的整復は1例のみであった。受傷後3年以上経過した頭上骨折24例についてみると, 軽度なものを含め内反射は3例あったが他の神経麻痺はみられなかった。内反肘のうち2例は初診時比較的軽度な骨転位の症例にみられており骨の成長を充分考慮した治療が要求される。

29. Condylcephalic nailing (Ender Pin) による大腿骨頸部外側骨折の治療経験

○中川武夫, 大木健資, 音琴 勝
広瀬 彰, 梅田 透(君津中央)
小林健一(沼津市立)
船津恵一, 宣保晴彦(金沢)

我々は大腿骨頸部外側骨折に対し, Ender Pin による Condylcephalic nailing を1975年11月より14例に施行した。本法は手術侵襲が少なく早期荷重が可能, 骨癒合が早く感染が少ない等の利点があり老人の大腿骨頸部外側骨折にした方法と考察された。さらに Ender Pin の固定力を知る目的でヒト大腿骨に転子部骨折を作り Ender Pin 固定し荷重負荷試験を行ない, 骨折型により最大荷重に差があり荷重時期は症例ごとに慎重に決定すべきと考察された。

30. 骨折治療における Minimal Fixation の検討

○田中 正, 大井利太, 小林紘一
鍋島和夫, 土川秀紀(上都賀病院)

骨折治療においては, 骨癒合に関与する骨膜, 周囲組織及び髄内血行を考慮に入れなければならない。

我々は, 組織侵襲を最小に止め, かつ比較的良好な整復と固定力を得るべく両者の得失を可及的満足せしめる方法, すなわち minimal fixation なる概念を考え治療に対処してきた。

今回, minimal fixation の概念と, それに基き行なってきた Hoffmann 式創外固定, 閉鎖式締結法につき報告した。

31. 経口的上位頸椎手術における2, 3の工夫について

○伊藤達雄, 山田 均(千大)

経口的上位頸椎手術は, 気管切開, 長期の気管内チューブの留置, 経鼻管栄養など術後管理に問題が多い。最近我々は, 整復及び固定に関しいささかの検討を加え, さらに他科の協力のもとに抗菌剤使用の工夫, 低圧カフ使用による経口挿管, 早期抜管, および加熱流動食の早期経口摂取による本手術を2例行ない好結果を得た。

これにより含嗽, 燕下が早期に可能となり, 唾液分泌も促進され口腔内は清潔となる。また吸気が湿潤化し, 呼吸器系へも好影響を与える。